早稲田大学大学院日本語教育研究科

修士論文概要書

論　文　題　目

台湾人日本語学習者の促音の習得
―台湾語力との関係に着目して―

薛　宇翔

２０１９年３月

修士論文概要書

本研究は、台湾人日本語学習者（以下、TS）の促音の習得を考察するものである。台湾語力との関係に着目し、TS の台湾語力と促音の習得との関係を明らかにした。以下、本論文の流れに沿って、各章の概要を述べる。

第１章　序論

第１章では、筆者の本研究を行うに至った問題意識および本研究を理解するために必要となる研究背景を述べた上で、本研究の研究目的を述べた。そして、本論文の構成を提示した。

筆者は自身の日本語学習の経験により、日本語の発音の仕組みに興味を持つようになった。そして、発音の中で「特殊拍」に注目することになった。その理由は、多くの日本語学習者は特殊拍が上手に発音できておらず、誤解が生じてしまい、日本語母語話者とのコミュニケーションに支障をきたすというようなケースがしばしば見られるからである。このため、特殊拍の習得が重要であると筆者は考えるようになった。中国語母語話者の特殊拍の習得に着目すると、従来の中国語母語話者の特殊拍の習得に関する研究では、TS を対象とする研究は比較的少ない。筆者は台湾人として、このことを踏まえ、台湾の言語事情も視野に入れて検討する中で、特殊拍の中の「促音」に着目するようになった。

台湾は多言語社会であり、中国語を母語として用いる人が最も多いが、中国語を除くと最もよく使われるのは台湾語である。そして、台湾語における「入声（にっしょう」という声調が日本語の促音に音韻上に近いため、TS はその影響を受け、促音の習得において有利であると予想した。しかし、台湾の複雑な言語事情により、台湾人の台湾語力（能力・使用頻度）はばらつきが大きいのである。このため、筆者は TS の台湾語力が促音の習得に関係する可能性があると考えるようになった。また、後続子音が閉鎖音（/p/、/t/、/k/）の促音（以下、閉鎖促音）は台湾語における入声と音節構造がかなり似ているのに対し、後続子音が摩擦音（/s/）の促音（以下、摩擦促音）は入声と音節構造の類似性が低い。このことを踏まえ、TS が促音を含む単語を知覚・生成する際に、単語によっては入声の特徴が手がかりになり、その知覚・生成の実態は促音の後続子音によって異なると予想した。

以上の問題意識および研究背景に基づき、本研究は TS の台湾語力（能力、使用頻度）

と促音の習得（知覚・生成）との関係、および促音の知覚・生成において後続子音による違いはあるかを解明することを目的とし、以下の 3 つのリサーチクエスチョン（以下、RQ）を設定した。これらの RQ を解明することで、TS の台湾語力と促音の習得との関係が明らかになり、TS の発音学習、および TS を対象とする音声教育への示唆を与えられることも期待される。

RQ1　TS の台湾語の能力と日本語の促音の知覚・生成はどのように関係しているか。
RQ2　TS の台湾語の使用頻度と日本語の促音の知覚・生成はどのように関係しているか。
RQ3　TS の促音の知覚・生成の実態は促音の後続子音によって違いがあるか。

第 2 章　先行研究

第 2 章では、本研究と関連する先行研究を概観した上で、先行研究の問題点をまとめ、本研究の位置づけを述べた。そして、本論文における用語の定義を提示した。

これまで、TS の促音の習得に関する研究はいくつか行われてきた。TS の促音知覚および促音生成の実態を明らかにする研究や TS における促音習得に関する問題点を指摘する研究などはあったが、台湾語を視野に入れて言語転移による影響の観点から考察する研究は、管見の及ぶ限りでは西端（1996）および馮（2010）の 2 つしか見当たらず非常に少ない。さらに、台湾語における入声と日本語の促音との類似点・相違点、および台湾の言語事情を踏まえると、台湾語力（能力・使用頻度）と TS の促音の習得との関係は無視できず、台湾語力も変数とし、促音の後続子音別で考察する必要があると考えられる。

以上のことを踏まえ、本研究を通して、TS の日本語の促音の習得の実態が把握できるようになるほか、台湾語力が促音の知覚・生成に与える影響も明らかになる。そして、台湾語における入声と日本語の促音との類似点・相違点による促音の習得への影響を掘り下げることにより、言語転移の実態も把握できるようになる。このため、本研究を以下のように位置づけた。

（1）TS の台湾語力と促音の習得はどのように関係しているかを明らかにする研究である。

（2）言語転移の実態を明らかにし、TS の発音学習および TS を対象とする音声教育への提言の一助となる研究である。

第 3 章　調査方法

第 3 章では、調査方法について、調査概要、調査協力者、調査手順、調査結果の分析および考察の順に述べた。

まず、質問紙調査では、台湾語の能力および使用頻度を TS の調査協力者に自己評価してもらった。台湾語の能力の評価に関しては、ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）の中国語版の自己評価表を評価基準とし、台湾語の「聞く能力」および「話す能力」を 7 段階評価（0～6）で評価してもらった。そして、台湾語の使用頻度の評価に関しては、週／月に台湾語を使用する日数を基準とし、「家庭内」および「家庭外」における台湾語の使用頻度を 6 段階評価（1～6）で評価してもらった。

次に、知覚調査では、『日本語能力試験出題基準』（国際交流基金・日本国際教育協会編著 2002）の語彙表を参考にし、促音の後続子音別（/p/、/t/、/k/、/s/）で調査語を選定し、計 100 語の調査語リストを作成した。その後、日本語母語話者（以下、NS）の調査協力者に調査語を読み上げてもらい、その音声を録音した。それから、NS の音声を TS にディクテーションしてもらい、筆者が採点した。

最後に、生成調査では、TS に調査語を読み上げてもらい、その音声を録音した。その後、TS の音声を NS に聞いてもらい、4 段階評価で評価してもらった。

調査結果の分析にあたって、3 つの調査で得たデータを相互的に照らし合わせ、統計解析ソフトを用い、TS の台湾語の能力、使用頻度と日本語の促音の知覚・生成との関係を分析した。

なお、本調査の調査協力者は NS 3 名、TS 30 名であった。

第 4 章　調査結果

第 4 章では、調査結果について、質問紙調査の結果、知覚調査の結果、生成調査の結果、構造方程式モデリング（SEM）による変数間の関係の分析の順に述べた。その結果、以下の 4 点が明らかになった。

（1）TS の台湾語の能力は、話す能力よりも聞く能力の方が高い。そして、聞く能力と話す能力とは高い正の相関関係がある。

（2）TS の台湾語の使用頻度は、家庭外の使用頻度よりも家庭内の使用頻度の方が高い。そして、家庭内の使用頻度と家庭外の使用頻度とは正の相関関係がある。

（３）台湾語の能力は TS の促音の知覚・生成に正の影響を与えている。一方、台湾語の使用頻度は TS の促音の知覚・生成に負の影響を与えている。

（４）TS の促音の知覚・生成の実態は後続子音によって異なり、/s/と/p/、/t/、/k/とは異なっている。

第 5 章　総合的考察

第 5 章では、調査結果に基づき、TS の台湾語力、TS の台湾語力と促音の知覚・生成との関係、後続子音別の順に総合的に考察を行った。

まず、TS の台湾語の能力に関しては、話す能力よりも聞く能力の方が高く、聞く能力が高い TS は話す能力も高い傾向にあることが明らかになった。また、台湾語の能力があるか否かの決定的な要素は話す能力であることが分かった。そして、TS の台湾語の使用頻度に関しては、家庭外と比べ家庭内の方では台湾語をより多く使っており、家庭内で台湾語をよく使う TS は家庭外でも台湾語をよく使う傾向にあることが明らかになった。また、台湾語の使用頻度がどれほどあるかの決定的な要素は家庭内の使用頻度であることが分かった。

次に、台湾語の能力と促音の知覚・生成との関係に関しては、TS の台湾語の能力が高ければ高いほど、促音の聞き取りおよび発音ができるということが明らかになった。それは、TS が促音を知覚・生成する際に、台湾語に存在する促音に音韻上に近い入声による影響を受け、「正の転移」が起こったためであると考えられる。このことから、TS に促音を指導する際に、台湾語における入声と促音との類似性を提示すれば TS の促音の習得に役に立つ可能性があるということが示唆された。そして、台湾語の使用頻度と促音の知覚・生成との関係に関しては、TS の台湾語の使用頻度が高ければ高いほど、促音の聞き取りおよび発音ができないということが明らかになった。それは、台湾語の使用頻度が促音の習得の妨げになっているためであると考えられる。

最後に、後続子音別に関しては、台湾語における入声は摩擦音/s/が生じないため、TS は摩擦促音を知覚・生成する際に、言語転移による影響が発生せず、促音の知覚・生成全般への影響力が閉鎖促音より弱いということが明らかになった。そして、摩擦促音の知覚が TS にとって最も困難であるのに対し、その生成は TS にとって最も困難であるというわけではないことも明らかになった。それは、持続時間の長い摩擦音は TS の耳には促音

として認識されていないものの、持続時間の長い摩擦音自体は発音しやすいため、TS は無意識に摩擦促音を自然に発音できた可能性があるためである。また、TS の摩擦促音の発音に関しては、不自然な発音が見られた。1 つ目の例は「閉鎖持続での代用」で、TS は台湾語における入声による影響を受けており、「負の転移」が起こっていることが原因であると考えられる。2 つ目の例は「ポーズでの代用」で、TS は摩擦促音の発音の仕方に対する認識が間違っており、「促音＝無音」と捉えていることが原因であると考えられる。

第 6 章　結論

第 6 章では、分析・考察結果を踏まえ本研究の RQ に対する答え、日本語教育への示唆、今後の課題を提示した。

まず、RQ に対する答えの内容を以下にまとめる。

RQ1 の答え：TS の台湾語の能力は促音の知覚・生成に正の影響を与えている。
RQ2 の答え：TS の台湾語の使用頻度は促音の知覚・生成に負の影響を与えている。
RQ3 の答え：TS の促音の知覚・生成の実態は後続子音によって異なり、/s/（摩擦促音）と/p/、/t/、/k/（閉鎖促音）とは異なっている。

次に、本研究で得られた成果に基づき、日本語教育への示唆を 3 つ提示した。1 つ目は、「学習者の母語・使用言語の特徴を把握する必要性」である。学習者が母語以外の言語を複数駆使できる、または日常的によく使うというようなことが増えてきている時代の中で、学習者の言語背景をよく理解し、学習者の母語・使用言語の特徴および日本語との共通点・相違点を把握した上で指導に携わることが学習者の日本語習得にさらに役に立てることができると考える。2 つ目は、「促音を後続子音別で指導する必要性」である。促音を指導する際に摩擦促音と閉鎖促音の発音上の違いを明確に示し、促音は必ずしも無音であるわけではないということをまず伝える必要がある。3 つ目は、「TS のための促音の発音指導の提案」である。閉鎖促音の指導に関しては、「閉鎖促音の発音は台湾語における入声と似ている」ということを TS に明示することが 1 つの方法である。摩擦促音の指導に関しては、摩擦促音は TS の台湾語力に関係なく TS 全般にとって困難であるため、摩擦促音の促音部に当たる音は持続時間の長い摩擦音/s/であることを強調することが重要である。

最後に、本研究の今後の課題を 2 点挙げた。1 点目は、TS の台湾語力、促音に対する認識、および入声による影響への意識についてインタビューを通してより詳しく探ることである。これにより、TS が直面している促音に関わる問題点をより明確に洗い出すことができ、それに応じて TS のためのより具体的かつ適切な指導法を考案することができると考える。2 点目は、若年層に限らずより多くの中高年層の TS も研究対象とすることである。これにより、新たな知見を得られる可能性があると考え、より広く寄与する研究となることが期待される。

参考文献

国際交流基金・日本国際教育協会（編著）（2002）『日本語能力試験出題基準』（改訂版）凡人社

西端千香子（1996）「閩南語母語話者が発話する日本語の促音語・非促音語の特徴と問題点」『広島大学教育学部紀要第二部』45, pp. 303-311

馮秋玉（2010）「中国人日本語学習者と台湾人日本語学習者における促音知覚の相違」『日本語研究』30, pp. 1-12